

2019 年度秋季  
大阪大学 言語社会学会・言語文化学会合同研究発表会  
(大阪大学言語文化学会 第56回大会)

2019年10月26日（土） 於 大阪大学 豊中キャンパス

発表要旨

第 1 室（豊中総合学館 3 階 301）

金俊平はなぜ女性に暴力を振るうのか？  
— DV 発生理論から読み解く梁石日『血と骨』 —

LEE Joongchan（言語文化専攻博士前期課程 2 年）

第 11 回山本周五郎賞を受賞した梁石日『血と骨』の主人公・金俊平は暴力を生業とする非道な人物だと見なすのが通常の解釈である。特に、彼の女性関係においては、鬼畜にも劣らない残忍性があると思われる。一見したところ、理不尽な暴力性が現れる彼の女性関係が本作品の一つの大きな特徴をなしている。

俊平の女性観を考察する中で大きな謎となるのは、なぜ彼が愛人契約を結んだ女性に暴力を振るうのかという問題である。これについては、社会学者の Murray Straus と Richard Gelles が提唱した DV 発生理論を基に本作品を読むと、彼の暴力には単なる野獣的なバイオレンスとは異なる性質があることが分かるだろう。

本発表では、俊平と彼の本妻である李英姫の関係性を、上記の理論をベースにして分析してみたい。Straus & Gelles によってベールを脱がされる関係性は俊平が抱く女性観に関する新たな一側面を明らかにするであろう。俊平は、単に、女性に対して不当な力を使っている訳ではないようだ。彼の暴力の背景には、〈日韓併合時に於ける皇民化政策に対する反発〉、〈在日コリアンコミュニティ内の団結〉、〈家父長制という朝鮮文化の維持〉などの社会的要素が見られなくもない。

表面上では、俊平の暴力は理不尽としか思えない。しかし、上記のファクターを重視していたかもしれない俊平は、学校教育をしっかりと受けていないため、意志の伝達能力が乏しく、世間一般が言う「暴力」に訴えることしかできなかったのであろう。それが、正当性を欠いた絶対悪の力だと言い切るには、議論の余地がある。本発表は、そのような観点から、俊平が極悪非道の人間だという通説に一石を投じたい。

本作品は厳つい在日コリアンである作者の実父をモデルにしており、内容は、実在した暴力的在日コリアンからインスピレーションを受けたとも考えられる。本発表が示すパースペクティブは、歴史上の在日コリアンに見られる暴力性に対する固定観念を覆すことができるかもしれない。

## 空飛ぶ大統領、負傷兵、脅威のプロットー Philip Roth の“The Plot Against America”における「子供の恐怖譚」

近藤 佑樹（言語社会専攻博士後期課程 2 年）

ユダヤ系アメリカ人作家 Philip Roth の“The Plot Against America”は、これまでの研究において、自らのファミリーヒストリーと第二次世界大戦さなかのアメリカ合衆国をめぐる歴史改変ものという奇抜な物語設定の持つ効果が議論されてきた。さらに、本作は 9.11 テロやブッシュ政権を念頭に置き、トランプ政権誕生を予見した著作として各メディアで紹介されることが少なくない。今回の議論ではそういった「外枠」の議論を念頭に置きつつも、ルーズベルトではなくリンドバーグが大統領となり、彼が反ユダヤ主義と戦争への非介入主義を声高に唱える 1940-1942 年のアメリカにおける「戦争」とそれがもたらす「恐怖／脅威」の表象を検討することを主な目的とする。

まず、有名飛行士リンドバーグが当時最先端の科学技術、つまり飛行技術を享受する「空の大統領」として描かれている点に注目する。さらに、彼がほとんど姿を現さない存在であることにも注目し議論を進める。

続いて、本作において身体負傷の現れが主人公 Philip 少年に大いなる恐怖の源泉であることを論じる。具体的には、戦場から帰還してきたおいの失われた左脚のことである。Roth 作品には、何らかの精神的／身体的障害が物語内で大きな意味を持つことがあるが、他の作品との比較対照からこの失われた脚の意味に迫っていく。

最後に、「機械仕掛けの神」とも指摘されたある種唐突なエンディングが作品全体にもたらした効果を一考する。大きく歪められた「実際の歴史」が半ば強引に元の鞘に収まり、結局のところアメリカは当の大戦に宣戦することになるが、いずれにしても少年の記憶には大きな爪痕を残していく。

このように、本作を、戦争が生んだホラー・ストーリーとして一人の少年の目を通して読み解くことで、本作のさらなる読みの可能性ないし語りの限界も同時に見ていきたい。

## 地図がつくるハイパーリアル — ディズニーランドの記号論

川村 明日香（言語文化専攻博士後期課 3 年）

地図は、客観的地理を写し取る。しかし実はそこには主観的要素も入り込んでいる。『オリエンタリズム』でエドワード・サイードは現実世界の地理と時間の認識における空想の反映を指摘している。現実に対してファンタジー性・詩的性質が付与され、ある空間が「魔法がかかったように」、「お化け屋敷のように」見える。詩的性質を持っていると認識された時点で、その空間はジャン・ボードリヤールの言う「ハイパーリアル」な記号となり、現実の空間をさらに「現実らしく」する。地図は恣意性を持っているのである。

東京ディズニーランドでは、このプロセスを逆手に取り、ファンタジーをいかにも現実であるかのように認識させようとする。あらゆる場面で地図が見られ、映画に登場した架空の空間が再現される。エントランスで配られる周遊のための地図に加え、アトラクションの中にも地図がある。船に乗って海賊の世界を冒険する「カリブの海賊」に入ると、海賊が訪れた島の地図がある。あるいは、アマゾン川、ナイル川、メコン川が合わさった架空のジャングルの地図がある。『くまのプーさん』の舞台である 100 エーカーの森の地図もある。

テーマパークでは、映画に登場する最初から詩的な非現実の空間を単純にコピーするのではなく、現実性を与えてハイパーリアルな記号を作り出す。現実にはファンタジー性が付きまとうということは、このメカニズムを使用して現実性を持たないファンタジーも現実らしさを持つことが可能と言える。客観的空間を描くはずの地図はここでは空想の世界を映しており、ハイパーリアルを強化するためのテキストとなっている。本発表では、実際の地図が本来持っている、ある種の恣意性が、如何にして架空の場所をハイパーリアルにするための装置として機能しているかについて、記号論的観点から明らかにする。

### 第 2 室（豊中総合学館 3 階講義室 L3）

## 中国におけるヤオイの受容状況

### — 関係性の読み替え：イギリスドラマ『SHERLOCK』を例に —

銭 蓄（言語文化専攻博士後期課程 3 年）

一般的には、ヤオイとは男性同士の恋愛関係を描いた女性向けの小説、マンガ、アニメ、ドラマ CD やゲーム、映画などの創作物を指し、近年では「ボーイズ

ラブ」や「BL（和製英語 BOYS LOVE の略称）」という呼称でも知られている。ヤオイは日本を起源とする 50 年近い歴史を持ち、日本独特のサブカルチャーとされているが、現在では、日本にとどまらず、異なる言語と文化を持つ海外でも人気を得ている。中国では、実際に多数の若者が男女を問わずヤオイを知っており、多くのヤオイの愛好家が存在している。

ヤオイは、マンガ、小説、アニメ、映画、テレビドラマ、音声ドラマなどの多数のメディアを媒体として存在している。ゆえにヤオイ愛好者は、そのような文化的メディアの消費者でもある。また、中国大陸のヤオイ愛好者は男性同士の恋愛が描かれている BL 以外に、男性キャラクターたちをメインとする作品も積極的に消費する。例えば、『SLAM DUNK』（集英社）などの日本の少年マンガ、『SHERLOCK（シャーロック）』（BBC 製作）などのイギリスのテレビドラマ、『X-MEN』シリーズ（20 世紀フォックス製作）などのアメリカの映画もお気に入りのコンテンツとして消費している。ヤオイ愛好者はこれらの非ヤオイ作品を消費しながら、ヤオイの物語として楽しんでいる。ヤオイ愛好者は物語に対する独特の読み取り方によって楽しむことができるのである。

本発表では、中国大陸におけるヤオイ愛好者の物語に対する独特の読み取り方の一例として、ヤオイ情報誌におけるイギリスのテレビドラマ『SHERLOCK（シャーロック）』の記事を取り上げる。本研究ではもともと探偵小説を原作とするドラマがどのようにヤオイ愛好者にとって男性同士の恋愛物語として受け取られているのか、またそれを成立させるための読みのプロセスを解明する。

## 「家族 BL」で描かれる新たな家族像についての分析 — 「近代家族」との比較をとおして —

東浦 可奈（言語文化専攻博士前期課程 2 年）

現代に続いている「近代家族」をとりまく社会には、恋愛・結婚・生殖を一連の流れとするロマンティックラブイデオロギーや性別役割分業といったイデオロギーが存在する。このような異性愛規範が強い社会においては、女性は自身の人生や身体に関して自由な選択をすることが困難なときがあり、女性の立場や権利が充分保障されているとはいえない。Me Too 運動やフラワーデモといった女性の権利向上のための運動が盛んに行われているのも、それが理由であろうと考えられる。

これらの外的運動に対し、本発表では、社会に対する女性の側からの内面での抵抗が「ボーイズラブ（以下「BL」と略す）」という領域に表れていると考える。溝口彰子は『BL 進化論 ボーイズラブが社会を動かす』（2015）において、BL を「女性による女性のための男性同性愛物語」と定義している。BL 業界は作者も読者も編集者も 9 割以上が女性であり、BL 創成期には「少女」の文化だといわれて

いたが、今日のBL文化の担い手は「少女」から「大人の女性」にまで拡大し、恋愛以外の社会的な問題に直面するようになった女性たちがこの文化を育てている。

このようなBLの一分野に「家族BL」というものがあり、男性同士のカップルが現実世界設定で子育てをするものや、男性同士での自然妊娠が可能な世界設定で恋愛を経て家族をつくっていくものなど、「家族」を描くことに重点を置いたBL作品が続々と出版されている。「家族BL」で描かれる家族像は、現実の多数派の家族とは異なる成り立ちをしている。女性による女性のための文化における従来とは異なる新しい家族像の描写や、それらが人気を博している現状について分析することは、性に関する既成のイデオロギーから成る従来の近代家族に関連する諸問題を解決するための重要な手がかりにつながると考える。

本発表では、「近代家族」が内包する既成のイデオロギーと関連させて、「家族BL」の成立と流行の意味を考察する。

## 社会問題の告発をめぐるオートエスノグラフィー

林 桂生（独立研究者）

Tara Rava Zolnikov は環境衛生と国際保健の専門家で、*Autoethnographies on the Environment and Human Health* (2018)はケニアの環境汚染などの問題についての報告だが、解説の合間に差し挟まれる「私」の現地での経験や「私」が感じたことの描写によって説得力が増している。文化人類学者 Deborah Reed-Danahay の編著書 *Auto/Ethnography: Rewriting the Self and the Social* (1997)では、スラッシュをつけたそのタイトルが示すようにオートエスノグラフィーは完全な“Auto”ではなく、各章の論文は「時には自分の、または他者の、あるいはその双方のライフストーリー」でもある。関心を共有していれば「他者」の物語でもよいという視点が現在のオートエスノグラフィーに採用できるなら、Zolnikov もその点は問題はない。だが、タイトルに“Autoethnographies”とあるのに、国連の統計などの解説量が多いこともあり、異国の文化の紹介に徹しようとした従来のエスノグラフィーとの違いが必ずしも明確ではない。つまり“auto”の部分が少なすぎるのである。

それでも、現在オートエスノグラフィーと言えば真っ先に名が挙げられる社会学者 Carolyn Ellis と Arthur P. Bochner の著作の中でも *Evocative Autoethnography: Writing Lives and Telling Stories* (2016)に見られるような自己の感情や弱さばかりを強調し“auto”を前面に出しすぎる手法よりは、注目に値する。Ellis の感情社会学の系譜に連なる自伝に類似したものより、社会問題を真摯に取り上げる異分野の専門家の参入はオートエスノグラフィーの存在意義を高めるものであると考える。

以上の点を念頭に置き、例えば、闘病する母親への自己の思念と葛藤を中心に描く David Rieff の *Swimming in a Sea of Death: A Son's Memoir* (2008) や自己の思索と哲学を重視する Arthur W. Frank の闘病記 *At the Will of the Body* (1991) らと、オートエスノグラフィーと言われている人類学者 Robert F. Murphy によるアメリカ社会に真っ向から物申す異色の闘病記 *The Body Silent: The Different World of the Disabled* (1987) の比較考察も通じて、社会問題を告発するというオートエスノグラフィーのより有意義なあり方を提言する。

### 第 3 室（豊中総合学館 3 階講義室 L4）

## 日本語、スウェーデン語とハンガリー語における 「現在との関連性」と結果性の相関関係

TÓTH MÁRTON ANDRÁS（言語社会専攻博士前期課程 2 年）

従来のアスペクト研究において、スウェーデン語の現在完了形は「現在との関連性」、「current relevance」以下 CR）つまり過去の出来事が現時点で引き続き効力を持つということを表すとされている Dahl (2000)。しかし現在完了形を持たない日本語とハンガリー語もこのような CR を表しうると考えられている。

そこで本発表で次の分析を行った。

- 1) CR の条件はいかなるものなのか
- 2) 3 言語の間に CR に関していかなる相違点・類似点が見られるのか

具体的に、各言語で動詞を 8 つずつ選び、スウェーデン語の完了形、日本語とタ形とハンガリー語の過去形を各言語の書き言葉コーパスで調べた。Dahl (2000) を参照し、明らかな結果がある動詞（例：壊れる）と明らかな結果がない動詞（例：光る）を研究対象とした。次に、動詞の結果の有無、または現時点に近接性を表す副詞（例：今、さっき）の共起によって CR の可能性を判断した。

結果は以下の通りである。

- 1) CR は、動詞の結果の有無と副詞を見ることでほとんどの場合は判断できたが、文脈に影響されることも多かった。
- 2) 3 言語とも明らかな結果を表す動詞が CR を表しやすい傾向が見られた。ただし、日本語とハンガリー語では、CR の可能性が低い例が圧倒的に多かった。

結論として、Dahl (2000)が述べているように、動詞の結果はCRの解釈に重要な影響を与えるが、文脈などの要素も重要なため、判断基準を再考する必要がある。また、CRは3言語に存在することが確認できたが、現在完了形を持つスウェーデン語の方がCRを表しやすいことが分かった。

#### 参考文献

Dahl, Östen (2000). *Tense and Aspect in the Languages of Europe*. Mouton de Gruyter, Berlin.

## 日本語の連体修飾環境における形容詞と動詞の相違点 —連続した形容詞・動詞を中心に—

CIOLCA RALUCA MARIA (言語社会専攻博士前期課程2年)

日本語の形容詞を対象としている先行研究では、動詞との比較を出発点にする傾向が見られる。八亀(2008)が述べているように、日本語における形容詞は、欧米語の形容詞とは異なり、単独で述語になることができるため、動詞と共に「用言」として認定され、動詞の下位分類として扱われることもある。ただし、八亀(2008)の指摘からもわかるように、形容詞と動詞の上記のような共通点を重視している研究の多くは、主文末に述語としてくるものを対象としている。

そこで本研究はいわゆる連体修飾に焦点を当てる。連体修飾環境においては形容詞と動詞の振る舞いが異なるという指摘をはじめ、これらの相違点を明らかにするために、複数の形容詞および動詞が連続した形で名詞を修飾している場合に注目する。この異なる振る舞いの一例として、形容詞は接続形式を必要とせず、「美しい優しい芸能人」のような形で名詞を修飾できるのに対して、動詞の場合には、「ダンスする歌う芸能人」のような構造が特に書き言葉としては容認されにくいという現象がある。本発表では『現代日本語書き言葉均衡コーパス通常版』から収集した例文によるデータ分析を通して、連体修飾環境における形容詞と動詞の相違点を構文の観点、そして意味・機能の観点から示す。

構文的な分析では、連続した形容詞および動詞を接続するテ形の必要性とその機能に関して考察する。また、形容詞あるいは動詞と関わる項が連体修飾環境の構造に与える影響についても議論する。意味・機能の観点からは、連続した形容詞および動詞の間にある論理関係を明確にする。本発表の結論は、日本語の形容詞と動詞は述語および連体修飾語の役割を担うことができるという点で似ているにも関わらず、連体修飾環境における名詞に対する係り方が異なるということである。

八亀裕美(2008)『日本語形容詞の記述的研究—類型論的視点から—』明治書院. 東京.

## 台湾華語の“雷”の意味変化

王 天保（台湾淡江大学日本語文学科 助理教授）

台湾華語の“雷”の本義は「光と巨大音が伴った雲からの放電現象」である。しかし SNS やインターネットでは“很雷（びっくりするほど駄目）”“爆雷（ネタバレする）”“踩雷（ダメもとで試す／地雷を踏む）”といった本義で解釈できない、比較的新しい用法はよく見受けられる。これらの用法は辞書に載せられた“雷”の用法項目には見当たらないものであり、近年流行語として使われるようになってきたものである。さらに“雷”という言葉は意味が多様になってきただけでなく、品詞も従来の名詞から形容詞、動詞などの用法にまで拡張された。しかし先行研究の殆どは漢語の“雷”が研究対象となったもので、台湾華語の“雷”に関する議論は見当たらない。古代の用法において漢語及び台湾華語にはそれほど相違がないと言われているが、台湾華語の“雷”は“雷文”“踩雷”“大雷”といった漢語と異なる使い方がある。これらの用法が現代の台湾華語では頻繁に使われていることは無視できない。そのため、本研究は台湾華語を中心に“雷”に関わる用法及び各用法間の関連付けについて考察する。

考察結果をまとめると以下の通りである。台湾華語の“雷”の本義は放電という自然現象で、その本義から兵器の“地雷”及び大騒ぎを表す用法へ派生する。さらに、字形の借用で、名字・名前としての“雷”も本義とリンクしている。そして、メタファーの動機づけによって“地雷”から「タブー」「不利益な物事、人」「内容公開」を表す“地雷”へ拡張していき、それらの用法から「不利益な物事、人」「内容公開」の“雷”の用法が生まれたと考えられる。